

第5回 火山都市国際会議 Cities On Volcanoes 5 に参加して

安養寺 信夫

あんようじ のぶお

(財)砂防・地すべり技術センター 総合防災部長



写真-1 無人化施工見学でリモコン操作に挑戦する参加者



写真-2 火山ハザードマップの展示を見る親子連れ

はじめに

火山都市国際会議Cities On Volcanoesは、国際火山学地球内部化学協会IAVCEIが開催する活火山を抱える都市における防災と火山との共生を考える国際フォーラムである。火山学や関連分野の研究者、行政・防災関係者が火山活動の社会に与える影響について議論する会議として、危機管理・都市計画・社会学・心理学・教育などの連携による、火山災害の軽減を目指している。最初の会議は1998年6月にイタリアのローマとナポリで開催され、以降ニュージーランドのオークランド(2001)、ハワイ島のヒロ(2003)、エクアドルのキト(2006)ではほぼ2年おきに開催されてきた。

2007年11月19日から23日までの5日間、島原市と日本火山学会の主催によりアジアで初めての会議が長崎県島原市で開催された(実行委員長：中田節也東京大学地震研究所教授)。開催期間中の参加者総数は会議参加600名一般参加、フォーラムを合わせて2,100名うち、海外からは31ヶ国、276名(大会事務局集計)となり、史上最大の参加者を得て成功裏に終了した。

今回、日本で開催されるに当たり、わが国の実情を反映したプログラムが企画された。火山砂防や噴火災害からの復興、災害実態の次世代への伝承など、単に火山を、災いをもたらす恐ろしい存在としてとらえるのではなく、多くの一般市民が参加できるような様々なテーマによるシンポジウムなどが開催された。

筆者はこれに参加する機会を得たので、その概要を報告する。

おもなプログラム

会議は大きく学術プログラムと住民や行政、マスメディアを対象としたフォーラムで構成された。

■学術プログラム

学術プログラムでは、火山に関係する学際的な研究分野が3つの大テーマに区分され、それらを軸にシンポジウムが開かれた。

シンポジウム1(火山を知る)は火山噴火現象、その予知や情報、災害などに関する研究の最新の成果を発表し、議論するもので、地質、地震、地球化学など多分野の研究者が中心となっている火山の科学的視点でのシンポ

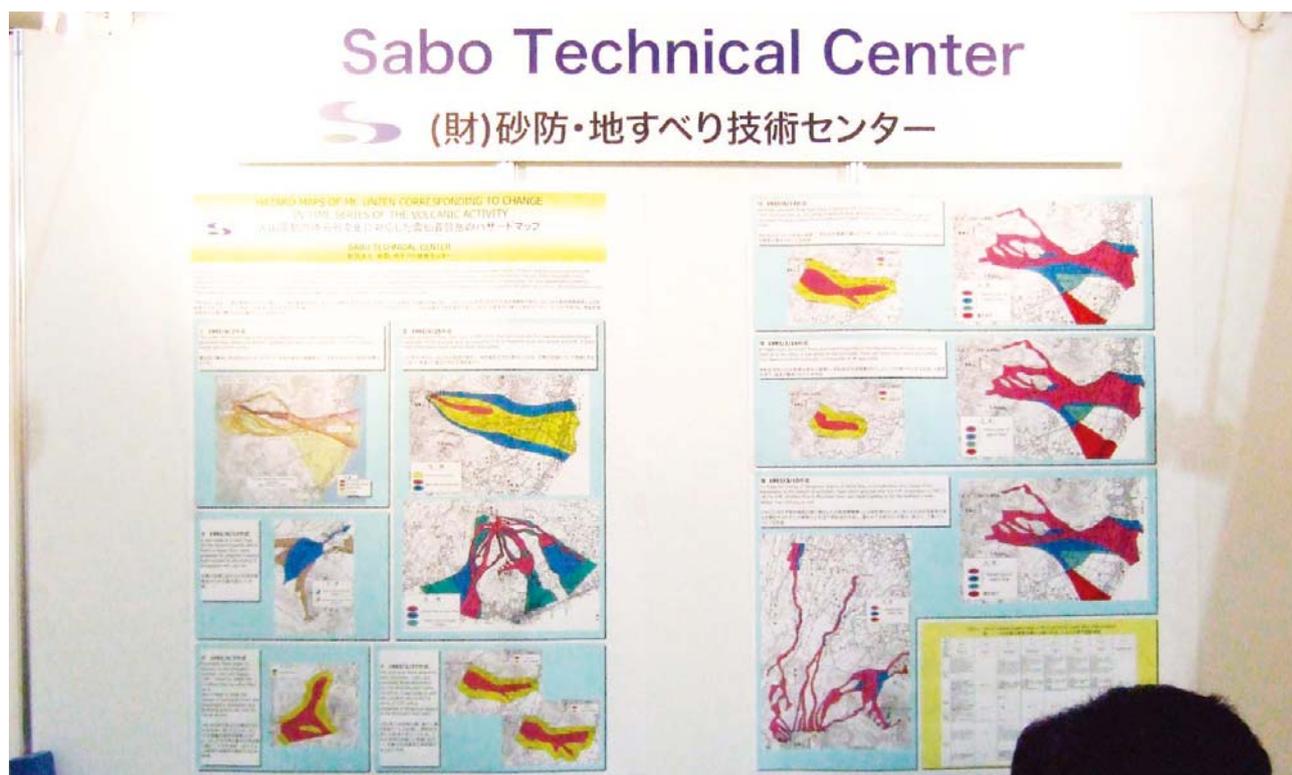


写真-3 当センターのブース展示会事務局

ジウムである。

シンポジウム2(火山と都市)は噴火時の危機管理、火山災害が生活や社会基盤に与える影響評価、災害軽減のための対策、土地利用計画などを発表し、議論するもので、研究者、防災、行政、報道などの関係者が参加した火山防災に関する多面的なシンポジウムである。

とくに筆者がコンビーナを務めたセッション2-2は、「火山活動の基幹施設への影響と効果的な“減災”対策」と題し、火山活動による都市や地域社会におけるライフラインへの影響の評価、社会基盤施設への危険性を軽減するための方策などが議論され、わが国が誇る火山砂防も一つのテーマになった。参加者は研究者、行政、技術者など多岐にわたり、ハザードマップ、危機管理、砂防対策の発表があった。

シンポジウム3(火山とともに生きる)は火山災害の軽減を図るために重要な教育・広報活動、種々の分野間の連携、過去の災害・復興体験の伝承など、住民も参加して火山の麓に暮らす知恵を話し合う場である。このシンポジウムが従来の火山学会関連の集会と大きく異なる。

■フォーラム

今回は日本らしさ、島原らしさを前面に次のようなフォーラムが開催された。

火山市民ネットフォーラム：

活火山地域に暮らす各国の住民ネットワーク

住民・マスメディアフォーラム：

噴火災害報道などに関する住民とマスコミの意見交換

災害教訓の伝承に関するフォーラム：

災害経験を次世代につなぐための方策

フォーラム 被災地つなぐ再生への思想：

噴火災害からの復興とまちづくり

火山砂防と減災フォーラム：

砂防技術者を中心とした対策のあり方など

こども火山発表会：

中高生が学んだ火山や地域に関する研究成果

火山を丸かじり「キッチン火山実験」：

火山噴火のしくみについて食材を用いて楽しく学ぶ

火山学Q&A世界の火山学者に直接聞いてみよう：

内外の著名な火山学者が子供達の質問にやさしく答える

■その他

その他会期前後には、国内各地の火山巡検が企画され、有珠山、伊豆諸島、富士山、鬼界カルデラ、阿蘇山、桜島などへ各国の研究者らが参加した。また会期中には11月21日(水)の1日行程で、雲仙普賢岳周辺の現地と



写真-4 セッション2-2「火山活動の基幹施設への影響と効果的な「減災」対策」で基調講演を行う池谷理事長(写真提供: COV5実行委員会事務局)

被災跡の見学が実施された。この巡検には島原市の小中学校への訪問も含まれており、子供達の熱烈な歓迎ぶりに多くの参加者が心ませるひとときを持つことができた。また、雲仙復興事務所の協力を得て無人化施工現場の視察と定点(1991年6月3日の火砕流の犠牲者がいた地点で現在は立入規制区域内にある)訪問のミニ巡検が催された。筆者は案内者としてこれに同行し、説明をした**写真-1**。

STCの取り組み

(財)砂防・地すべり技術センター(以下STC)は火山砂防に関する調査・研究を推進する立場としてこの会議に積極的に参画した。まず後援団体として内閣府、文部科学省等に名を連ね、小職は実行委員会に参加した。

以下にSTC職員の関わった発表などを紹介する。

■展示ブース **写真-2,3**

今回の国際会議にSTCは後援団体として寄付を行った。後援団体には展示ブースが割り振られ、火山砂防を中心にSTCの研究成果をアピールする場を得た。

■基調講演 **写真-4**

・雲仙普賢岳の平成噴火と火山災害対策

当センター理事長 池谷 浩がセッション2-2の基調講演として上記のテーマで講演した。

■研究発表

・砂防工事安全確保のための溶岩ドーム監視体制について(ポスター)

松井宗廣(STC)、近藤浩一(同左)、秦 耕二(雲仙復興事務所)、石坪昭二(同左)

・火山砂防計画における想定現象の累積頻度に基づく



写真-5 セッションで口頭発表中の筆者(写真提供: COV5実行委員会事務局)

評価(口頭) **写真-5**

安養寺信夫(STC)、酒井敦章(同左)、石井靖雄(富士砂防事務所)

・火山噴火シナリオに基づく時系列ハザードマップの作成(ポスター)

安養寺信夫(STC)、酒井敦章(同左)、石原和弘(京大防災研)、武士俊也(大隅河川国道事務所)

・富士山噴火に伴う地域社会への影響と火山砂防計画について(ポスター)

石井靖雄(富士砂防事務所)、石原慶一(同左)、

土屋郁夫(同左)、安養寺信夫(STC)、酒井敦章(同左)

雑感

今回の国際会議は単なる研究発表の場だけではなく、活火山周辺の暮らしや市民と接する場でもあった。島原市民は1年以上前から開催準備を進め、とくに慣れない外国からの訪問者たちに気持ちよく滞在してもらうため、簡単な日常会話の練習や案内の方法などを市民中心に練習されたと聞いている。その甲斐があっただろうか、ホテルや商店、飲食店などでもアットホームな対応がなされた。筆者も外国からの参加者と食事をした際に、市民の方々の歓迎ぶりに感心した次第である。

噴火終息後も島原へ訪れる観光客数が噴火前の状態に戻っておらず、財政的にも厳しい中で本大会を敢行された島原市長や職員のご尽力、実行委員長として公務多忙の中でリーダーシップを発揮された中田節也東京大学地震研究所教授ら火山学会の関係者、さらに多大な支援をいただいた雲仙復興事務所や国土交通省の関係者、そしてボランティアとして大会を支えていただいた市民の皆様に厚く感謝申し上げます。